

発行のきっかけ

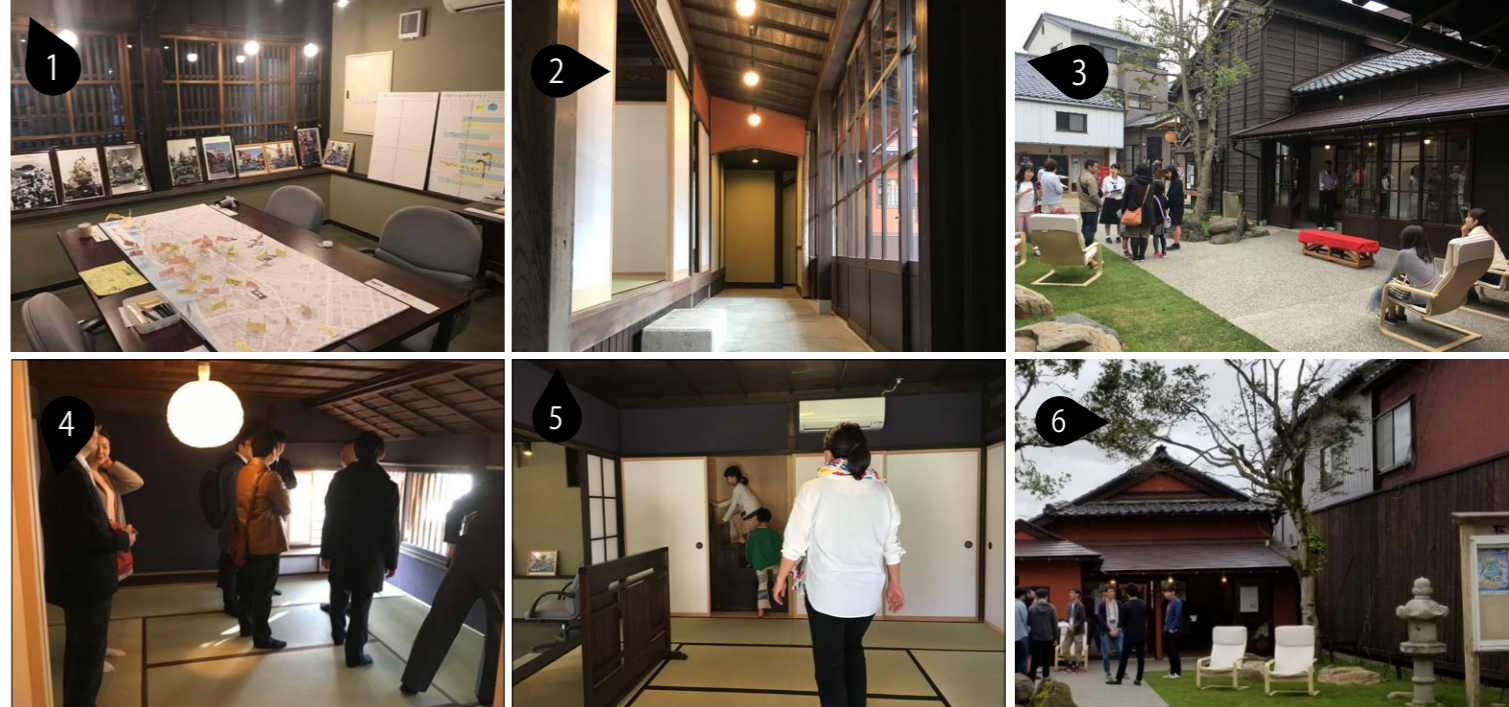
2018年4月1日、福井県坂井市三国町にアーバンデザインセンター坂井(UDCS)がオープンしました。この冊子は発足に関わった4名に経緯や現状、これからのまちづくりについてのインタビューを行いまとめたものです。この組織の発足・運営には東京大学都市デザイン研究室の学生とOB・OGがたくさん関わっています。都市デザイン研究室マガジン編集部一同はこの機会にマガジンを発行し、研究室関係者だけでなく、UDCSを利用する地元の方々にも知っていただけたらと思っています。



INDEX

1. UDSCSってなに?
2. インタビュー UDSCSを支えるスタッフたち
3. 三国と東京大学都市デザイン研究室

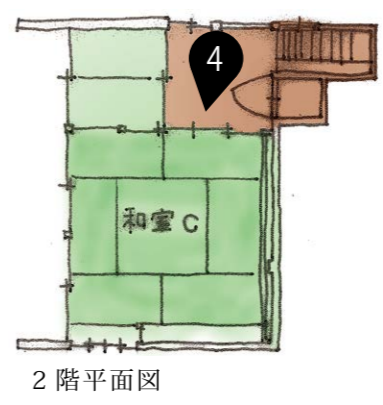
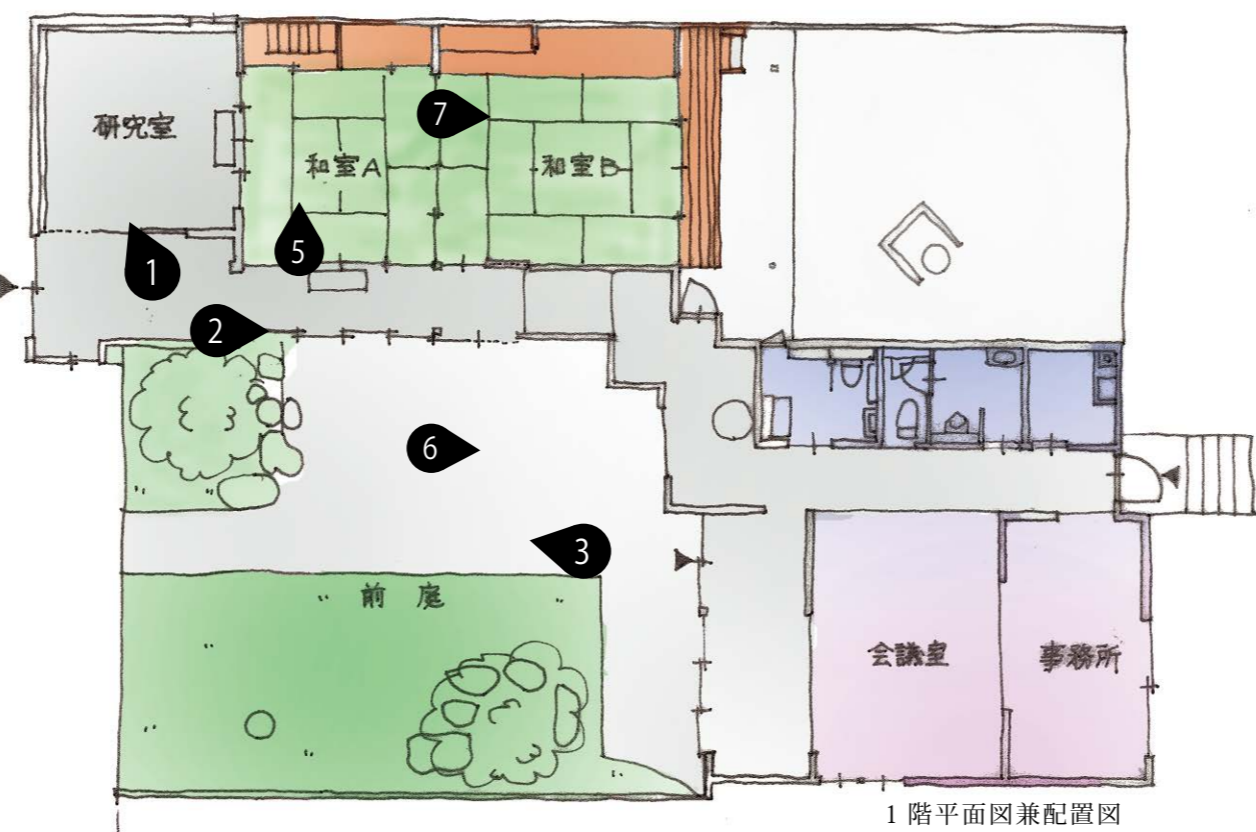
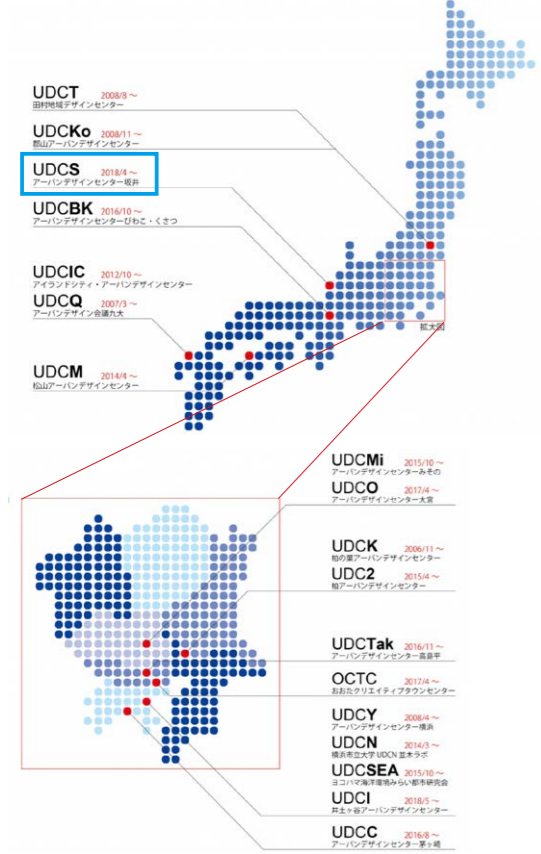
1.UDCS ってなに？



UDC とは？

UDC (アーバンデザインセンター) は公民学がそれぞれの良さを持ち寄り連携しながらまちづくりを進める組織です。UDCの始まりは、2006年に遡ります。故・北沢猛東京大学教授によってセンターの必要性が提唱され、当時つくばエクスプレスの新駅建設の進んでいた柏の葉(千葉)において第一号であるUDCK(アーバンデザインセンター柏の葉)が発足しました。2018年5月現在、全国18拠点に展開しています。

↓全国のUDC分布図(UDCイニシアチブ公式ホームページより引用)



UDCS 設立の経緯

2014年度より東京大学都市デザイン研究室が、空き町家の利活用による地域再生の調査研究を行っています。その調査報告であり、まちづくりの方向性を示した、2016年3月発行の『三国まちづくりビジョン』においてアーバンデザインセンター三国が提案されました。

2018年4月、実際に空き町家の利活用の体現として「雲乃井」を改修し、UDCS(アーバンデザインセンター坂井)をオープンしました。



UDCSで何ができる？

UDCSは町の暮らしや、建物に関する相談ができる場所です。具体的には、まちづくりの相談、空き家の相談、企業側の空き町家活用(空き町家需要)にも対応しています。施設は貸し出しスペースとして和室2つ、土間、2F和室、前庭があります。前庭は子供たちの遊び場や散歩ルートとしても利用できます(トイレもあります)。また、土間には展示コーナーを設けており、三国祭りの写真などを展示しています。会議室は学生の自習場所などや喫茶スペースとしても利用されています。

↓UDCSの公民学の役割と参加団体

公 public	政策の公定力(許認可業務) 製作所動的資本力	参加団体	坂井市 坂井市商工会 坂井市観光連盟 三国町観光協会	坂井市文化協会
民 civil	地域住民の実行力 民間企業の資本力・技術力	参加団体	地元住民 区長会 福井銀行 福井信用金庫	福邦銀行 リコージャパン えちぜん鉄道 京福バス
学 academic	学術的知見に基づく先導力 利害関係者とは異なる調整力	参加団体	東京大学 東京都市大学 福井大学 福井県立大学	PTP 福研宅地建物取引業協会 三国會所

↓UDCSの主な役職

センター長	西村 幸夫	神戸芸術工科大学 教授
副センター長	野嶋 慎二	福井大学 教授
副センター長	江川 誠一	福井県立大学 講師
副センター長	中島 伸	東京都市大学 講師
チーフディレクター	矢吹 剣一	東京大学 特任研究員
サブディレクター	田谷 良人	福井県 地方創生チーム
サブディレクター	谷根 康弘	坂井市 企画情報課
サブディレクター	浜田 剛	一般社団法人 三国會所
サブディレクター	倉橋 宏典	一般社団法人 三国會所

UDCS を支えるスタッフたち

2 インタビュー



サブディレクター
倉橋宏典

チーフディレクター
矢吹剣一

副センター長
中島伸

サブディレクター
谷根康弘

Text: 中戸 / Nakado

公民学が連携してまちづくりをサポートする組織である UDC ですが、もちろんその運営には官民学3つを代表する専門家たちが関わっています。今回我々は、それぞれの立場からディレクターを務める谷根さん、倉橋さん、矢吹さんと、UDCS 副センター長を任されている中島先生にインタビュー。立場が違うからこそできること、そして三国への思いを聞くことができました。3つの視点を通して、UDCS がなんのための組織なのか、その輪郭を明らかにできたのではないのでしょうか。



「公」の立場から

「これはいいな」、と直感して

— UDC 設立まで、どのように尽力されたのでしょうか？

谷根：平成 27 年度に『三国まちづくりビジョン』という冊子が矢吹くんを中心に作成された。そのビジョンの中のアクションプランの一つに UDCS が含まれていたというのがきっかけです。2016 年には中島伸先生のお話を聞く機会があって、そこで初めて UDC というものを知った。「これはいいな」、と直感して、是非三国にも設置したいと思いました。UDC に重要なのは拠点だという話を聞いて、なんとか市の方で整備したいな、というのがスタート。ちょうど国の拠点整備交付金というまさしくずばりの予算が国で制度化されたこともあって、それを利用することにした。最初の計画では元 NTT 支店事務所が空いていたので、そこを拠

点にしようと考えていたが、どうも交渉が難しい。どうしようかと迷っていたとき、いまのこの建物が思いついた。今はセンター長を務められている西村先生や福井大の野嶋先生、アレックス・カー^{*1}さんにもこの建物を無くしたらだめだ、と言われたのを思い出したのです。そこでオーナーさんに相談したところ、快諾していただいた。建物は無償で寄付していただいて、市の方で改修して使っています。

— どのような体制で運営されているのでしょうか？

谷根：基本的に休館日は不定休。どうしてもディレクターをおけないときは、例えば半日か一日を休みにしたりしている。今の体制では、矢吹くんをチーフディレクターとして、僕の他にあと三人のサブディレクターの計五人で回している。センター長は西村先生で、中島先生をはじめ三人の副センター長がいるが、現場で実質的に指揮を取るのはこの五人。みんな完全に有志

で、テレワークなどを利用して兼業しているメンバーもいる。現在の UDCS は任意団体だけれど、半年後くらいをめどに一般社団法人にしたいと考えている。現在は 46 人ほどが加入していて、参加団体もだんだんと増えて行っている状態。僕は元々三国の住民で、地元で知っている人が多くて、かなりのスピード感を持ってやっていけている感じです。

スピード感を持って、サポートしていく

— UDCS の具体的な事業について教えてください。

谷根：始まったのが今年の 5 月 8 日なので、具体的に事業として動いているのは 1 つ。市が UDCS に委託料としてお金を払っていて、構成メンバーそれぞれに恩恵が行くように組織を組んでいます。他にも、三国高校と連携しているプロジェクトもあります。これはたまたま僕が東大チームのスカイプミーティングを聞いて、三国高校生とコラボできればとの話題が出て、たまたま PTA の副会長でもあったので、そのまま校長にお願いして、その 10 日後にはイベントができた。今は総合学習の一環として一年間連携することになった。そんなスピード感で動いています。



三国祭りのさなか、UDCS の事務室の前で話し合うディレクターたち。裏方として祭りを支える

— いまの谷根さんの、公としての仕事のあり方について教えてください。

谷根：僕がいまディレクターとしてやっていくべきなのは、「ことここが繋がるんじゃないかな」ということを考えて行動していくことだと考えている。やりたいことがある人を支援してあげる、専門的なことから、そのあとのネットワークもマネジメントしてサポートするという感じ。それと、UDCS 自体の運営も回していかなければならないので、普通だと民間のシンクタンクなどが行っている市の委託業務を、UDC で受けられるようになったらいいなと考えている。そちらの方が市にとっても良いものができると思っています。

日本のどこにもない、唯一の場所に

— UDCS の短期的な目標を教えてください。

谷根：そもそも UDC とは何か、という認識が一般的にないので、懐疑的なイメージを持たれているな、というのは感じていて。なんでここにそんなお金をつけるのか？とか…。なので、短期的な活動目標は、まずできるだけ実績を作ること。民間や公共と連携して地域の課題に取り組むという組織なので、たくさん実績を作れば、「こういうこともしました」ということができ、信頼を積み重ねることができる。だから今はできることから素早く動いていっています。

— 将来に向けての展望や構想などはありますか？

谷根：極端なことを言うと、UDC は市役所の

機能を置き換えるものになれるかもしれない。いま、行政は役所だけで考えた上で公平性を担保しようとしているから、スピードがとにかく遅い。市役所で考えて、それが大丈夫かを確認するために住民説明会を開いたりパブリックコメントを設けたり。それを修正して予算をつけて議会に上程して…。そのプロセスで確実に 1 年以上かかるものもある。一方で、UDCS には行政・大学・民間、そして地元住民という異なる立場の、でも意思統一できる人たちが集まっているから、「これやりたいね」と話したことをその場で決定して動くことができるという側面がある。今はそれがちょっとずつ上手くなっていて、なんとか事業が展開していった状態。この 1 年は実績を作ることが目標だと思ってたけれど、UDC ではこんなにも素早く物事を動かせるということがみんなに理解してもらえたら、と思っているし、UDC の存在が知られるようになって、例えば市役所の若手職員がここに常駐し、スキルを磨くことができるようになれば、夢のある坂井市になるかな、と思う。坂井市も UDCS も、日本のどこにもない唯一の場所になってほしいと本気で思っています。

小さい頃からお互いを知っているからこそ、できること

— これからどのように展開していくのでしょうか？

谷根：連携をお願いするべきなのにまだしていない大学や住民組織はまだたくさんある。今入っている組織は、「入ってください！」と頼んで入ってくれたところ。それ以外にも、UDCS の活動や意義を理解してもらった上で、

連携する組織を増やしていった、大きな集合体になりたいと僕は考えています。

また、今はもう市役所単体でどうにかしている時代じゃない、という気持ちもあって。僕の場合は市役所としての活動も、地域運動など住民としての活動も両方している、双方から UDCS を取り巻く動きが広がっている。片方がダメならもう片方がカバーしていくといったような、何か一つに頼るのではないバランス感覚は、すごくいいなと思っているし、この先もそうあるべきだと思っています。

— 谷根さんは「公」とであると同時に、三国に暮らす「民」でもありますよね。

谷根：UDCS で活動していくにあたって、住民としての繋がりが役立つこともある一方で、僕は生まれてずっとここにいる以上成功させなきゃというプレッシャーを感じることもある。失敗はできないな、と。それが面白い部分でもある。

周りを知っている人ばかりなので、「お願い！」と頼めるのは良いですね。仕事はやりやすいと思う。「あいつに言われたら断れんな」と無理やり OK してもらうこともあったりする。それが矢吹くんには剛腕にも見えるかもしれないけれど、小さい頃からお互いを知っているからこそできることでもあると思います。

ただ、行政側の人間としては、主役になってはいけないと思っている。実はネットワークを繋ぐのに奔走しているのだけれど、あくまで裏方。主役は住民であったり、今日のようなイベントでは東大生や三国高校の生徒たちであったり、ここで何かやりたいという熱い思いを持っている方だと思っています。■



日暮れの UDCS。部屋では夜話会というイベントが行われていて、その光が漏れている。中庭ではまだくつろいでいる人も

*1 アレックス・カー：アメリカ出身の東洋文化研究家、古民家再生の第一人者。三国湊町家プロジェクトで、氏はゲストハウスをプロデュースしている。



「民」の立場から

倉橋 宏典

Hironori Kurahashi

福井県土木部建築住宅課 企画主査
三國會所 町並み委員会副委員長
UDCS サブディレクター

東京にいても、 いつも三国のことを考えていた

—倉橋さんのUDCSでの立場と、三国との縁を教えてください。

倉橋：今は県庁に務めているが、立場としては民間。三國會所²の町並み委員会の副委員長として、一民間人として関わっています。まちとの関係でいうと、僕は実家が三国。東京に出て行った時には三国はただの田舎だと思っていたが、西村先生との出会いが転換点となった。東京大学・都市工学科に進学して、卒業設計のテーマで悩んでいた時、西村先生との飲み会の席で出身地を聞かれ、「三国です」というと「すごいね」と。それで改めて外から自分の生まれ育ったまちを見てみると、都市の構造も残っていて歴史もあって、「すごいな、面白いまちだな」と気付いた。それで結局、卒業設計を「祭の似合うまち」というテーマで三国でやることになり、その発表を旧森田銀行でも行った。それが最初の縁になって、当時の三国のまちづくり推進協議会から「僕たちの活動の指針となる計画と一緒に作ってくれないか」と声がかかり、三国でのまちづくりに関わり始めた。それ以降は修士に上がっても、三国に色々関わっていた。卒業後は都市環境研究所³で働いていたけれど、そこで仕事をしながらも、常に福井、三国が頭にあって。結婚して子供が生まれ、どこで暮らしていこうかと悩んでいた時に地元に戻ろうと思って、福井県庁を建築で受けて通ったのをきっかけに福井に戻ってきました。

—三國會所や東大・都市デザイン研究室とは、どのように関わっているのでしょうか？

倉橋：東京にいる頃、三国湊魅力づくりプロジェクトというNPOに関わっていた。遠隔地でも

できる仕事をしながら。そのあと福井に帰ってきたタイミングで三國會所に入って、町家プロジェクトなんかをやってきた。県庁の仕事が終わった後、福井市から三国まで来て夜に話をしたりして。このプロジェクトには東大に関わって欲しかった。ずっと研究室を三国に呼びたかったんです。自分の生まれた場所に来て欲しいじゃないですか。特に東大のプロジェクトで出てくる成果はとてもすごくて、そこらのコンサルよりずっと緻密に調査をする。きつといいものが出てくると思っていた。西村先生は三国のことをずっと気にかけてくださっていて、街並み塾でも何度か三国に来られていた。そんな時、先生に「東大でプロジェクトできませんか」とって声をかけたら、「できそうだね」ということで快く引き受けてくださって、いまの東大三国PJが立ち上がったんです。それが5年くらい前の話かな。その時に中島くんが入ってくれた。



東大との関わりは今年で5年目。三国プロジェクトに関わっていたOB・OGたちが仕事の合間を縫って三国へ集合、かつてを思い出していた。今年オープンしたばかりのUDCSを初めて見た先輩たちは皆興味津々

谷根さん達が巻き込んでくれて、 気付いたらディレクターに

—UDCSの立ち上げと、ディレクターになった経緯を教えてください。

倉橋：実は都市環にいたときに全国初のUDCであるUDCK⁴の立ち上げに関わっていて、柏の葉キャンパスタウン構想も北沢猛⁵先生と作ったんです。UDCKの初期を間近で見ていた。その時から福井にもUDCが欲しいなあ、とずっと思っていたんです。そんな話をしていたら、東大がまちづくりビジョンに位置付けて書いてくれた。市の谷根さんたちがUDCSを作るんだ、と動いていく中で、準備委員会に入れてもらって会議に参加したりして。センター開設後は「楽しそうじゃん」とカフェ実験や夜話会を企画してやってみたり。それに都市計画を学んだ身として、都市デザイン研究室の出身者として、UDCができるなら中核に入りたし、何かやりたいと動いていたら、谷根さんたちが巻き込んでくれて、気付いたらディレクターになっていた。

—官でも学でもなく、民間の立場で関わる意義は何か？

倉橋：僕の場合は官の仕事では関われないし、もちろん学の立場でもなく、民間として関わるしかなかった。でも民間として、しかもほぼ一個人として関わっているからこそ自由にやらせ

てもらっているし、なんでもできる空気感がある。それはきっとUDCSの気風のようなもので、谷根さんは柔らかいし、矢吹くんみたいに若い人も関わっているし。「よくわからないけど、やりたいことやろうぜ」という場所があったほうがまちのためにいいと思っている。自分たちだけじゃなくて、まちの人にも色々できるんだって思ってもらえるだろうから。

こないな、いつも会議ばかりやってるな」と思っていたけれど、だんだんと変わっていった。UDCSは構えがウェルカムだから、なんだこれ？と思って入ってくれる人も多し、東大生が来たときにはUDCSを拠点に活動してくれば、みんなが知るようになると思います。



倉橋さんが企画し、UDCSの建物で行われた「三国湊夜話会」の様子。まちの方の前で、倉橋さんがまちの歴史と構造・祭りとの関係性について熱く語った

ゆるい連携から、 いろんなものを結び付けたい

—UDCSのこれからのあり方について、どう思っていますか？

倉橋：組織そのものを大きくしていくというよりは、運営しているコアはしっかりしていて、そこに地域の方、いろんな人たち、企業、団体が「この指とまれ方式」で集まってくるようなものになったら面白いかな。変にUDCSの運営に関わることを強いるのではなくて、ゆるい連携が広がっていけばいい。媒介する力が大きくなって、いろんなものを結びつけて行くような。

—今はまだ、UDCSが地元の人に認知されてはいない状況ですよね。

倉橋：まさにそう。4月にできたばかりで、「UDCSってなんだ？」という状態。この地区の人はようやく知ってくれたようだけれど、離れた地区の人はまだ全然わかっていないと思う。でも、それもいろんな仕掛けをして行く中で認知度は上がって行くものじゃないかな。UDCKの時も最初はそうだった気がする。「人

「都市デザイン」を、 行政も民間も巻き込んで

—将来的な展望や思いを教えてください。

倉橋：「アーバンデザイン」という名前を冠している以上、専門的な都市デザインをきちんとやっていく場所であるべきだと思う。それが中島くんとか矢吹くんとか、それに僕のような都市デザインの視点を持った人間が果たすべき役割だし、行政計画にも活かせるような提案をして、発信していきたい。三国におけるまちづくりの専門家として信頼される立場になって、「UDCがそういうなら間違いないね」とみんなが思ってその方向に向かっていけるような。行政にも認知してもらって、専門家がいうのだからきちんとお金をつけていこう、と思われたいような立場になれたらいいですね。また、三国だけではなく、UDC「S」なので、坂井市の中での都市デザインの立場を確立したいとも思っている。都市デザインって、行政の中ではあまりにも知られていない。特に地方都市だと「何それ？」という感じ。まちづくりという言葉をみんな使っているけれど、話す人によって定義は様々ですよね。やはり空間とか風

景には拘りたいし、そういう環境を少しずつ良くしていくことで、まちは変わっていくし、暮らしも楽しく豊かになるんだということを見せていきたい。都市の文脈を踏まえて形にあらわしていく、そんな本来的な都市デザインを行政も民間も巻き込んで進めていきたい。あと、住んでいる人はわからない、当たり前だと思っているけど、大切なこと。これは風景でも祭りでも同じだけれど、大事なと言われなくて気づかないこと。それを気づかせてあげるのが僕らの仕事だと思っているし、UDCもそういう場だと思う。住んでいる人にまちの価値を伝えていくこともまた、とても大切なことと思っています。

みんな祭りのことが 大好きだから

—最後に、三国のいいところ、気風を教えてください。

倉橋：三国のいいところは、祭りに集約されると思う。みんな三国のこと、祭りのことが大好きだから。祭りの時にガッツと盛り上げられるような雰囲気があるし、祭りのためって言えばなんでもできてしまう。例えば家を修繕するのも祭りまでには、みたくに。単に一年のうちの数日間だけの行事ではなくて、区切りというか、気持ちの中に常に祭がある。三国は風景も何もかもが祭りに象徴されている。それが一番いいところなんじゃないかと思えます。■



UDCSの中庭から見た祭りの風景。ちゅうと山車が目の前を通りかかる。中庭では祭囃子の三味線の演奏が始まった

²三國會所：三国の町並みや文化の保存・継承の取り組みを行っている。西村幸夫先生を招いた町並み塾や、三国湊町家プロジェクトなどを手がける。

³都市環境研究所：都市開発、まちづくりを専門とするコンサルティング・プランニング企業。

⁴UDCK：アーバンデザインセンター柏の葉。2006年に設立。東京大学・柏市・地元協議会・鉄道会社・不動産企業などが運営を主導する、UDCの先駆け。

⁵北沢猛：元東京大学教授。アーバンデザイナー。横浜や京浜工業地帯の計画に携わっていた。UDC構想を唱えた第一人者で、初代UDCKセンター長。



矢吹 剣一
Ken-ichi Yabuki
東京大学 特任研究員
UDCS チーフディレクター

「やらない」という選択肢は、なかった

—UDCSのディレクターになった経緯を教えてください。

矢吹：2016年末から中島伸先生や市役所、UDCSを構成する団体で、UDCS設立準備委員会を作って1年以上準備していた。体制を作るという時にディレクターが必要だから、「誰かなってくれる人はいないか？」という議論はずっとあった。それで、「博士出たらUDCSのディレクターはどうか？」という話も上がっていた。

僕は研究員の他に、もう一つくらい仕事をやっても良いのではないかと思っていた。UDCSから本当にオファーを頂いた際には、迷いがないことはなかったが、「UDCのディレクターやらないか？」と言われて断るとい選択肢はなかった。今まで北沢先生たちがやってきたUDCの流れを見てきて、そこに自分が関わることのできるポストがあるのに、ならない手はない。2015年から3年間三国プロジェクトに関わってきて、三国のことも少しは知っているつもりだし、西村教授・中島伸先生というつながりからすると僕がやるのが適任だろうとも思っていました。

理論と実践がリンクする

—学の立場としてUDCに関わり、まちに入って一番良かったと思うことはなんですか？

矢吹：やっぱり現場は楽しい。学ぶことがたくさんある。正直めちゃくちゃ多いと思う。それに、動いている最前線に居られるから、UDCを作った効果が目に見える。理論と実践という関係でいえば、UDCではそれが一致している。

アーバンデザインセンターの本⁶があって、ディレクターになるにあたってもう一度読んで見たのだけれど、あれに書いてあることは本当だなと感じている。例えばまちに開かれた場所を作るのが重要、と書いてあるけれど、まさにこのUDCSがそれ。塀を取り払ってオープンスペースにしている部分が象徴的です。他に負の遺産を活用するということも書いてあるが、同じくUDCSがその通り。放置してあった空き家(町家)をセンターの拠点として再生した。だから、現場にいと、理論もその通りだと理解できて、実践とリンクしながら両輪で動いている感じがします。今までの実践から来た理論、前田先生・野原先生・黒瀬先生・遠藤新先生⁷たちが積み重ねて来た理論が本当に応用できる。三国のような歴史的な市街地でも通用すると感じている。

—マニュアルには書いていない、理論化されていない部分はありますか？

矢吹：既存の地縁とか歴史が圧倒的に資源としての強さを持っているところがある。この地縁の強さ、関係性の密さを使って、現場の課題を解決していく。例えば「祭の時、そこで味噌練やります」と言った時、すぐにその区の区長さんに電話して解決するとか。ここは向こう三軒両隣の人々がとても協力的で、あらゆる調整が、これまでの地縁・歴史・まちづくり活動のネットワークを活かして、顔の見える中でスピード感を持って進んで行く。もちろん、顔の見えすぎるとい悪い面もあります。また、今見えている人以外にも三国町に住んでいる人が居るわけなので、ここからどれだけ裾野を広げていけるかがいまの三国に求められているところだと思います。

フラットさと、少しのよそ者感を持って

矢吹：また、既成市街地にUDCを作るということは、これまでの地域社会にある種の風穴を開けて風通しをよくすること、凝り固まったところをほぐすことでもあると考えている。実は、まだ「アーバンデザインセンター」という名前は全然覚えられていなくて。みんな「アーバンセンター」とか「アーバン」とか呼んでいたりする。「アーバンデザインセンター坂井」と決まった後に、都市工の先生には「三国なのだから、三国なんとか処(どころ)、とかの方でもいいんじゃない？」とも言われたけれど、結局、現地に居ると今のところ僕はこれで良かったと思っている。変な言い方だが、今はフィットしていないのが地元で求められていたんじゃないかと。新しい風、今までの三国のまちづくりじゃないものが入って来ているのがむしろ良い、歓迎されているという部分も少なからずある。今までは色々な人が入ってくるチャンネルがなかったけれど、UDCでは公も民もフラットなのでいろんな人が関与できる。これが大事ですね。

それと、僕は三国の人からは「東大の人」という学の立場として見られているので、「この人になら相談しても大丈夫かな」というような信用もあって、フランクに相談しに来てくれる。フラットさと少しのよそ者感が、いまの三国の人たちにとっては必要なものかもしれないと思いますね。



矢吹さんには三国プロジェクトの東大生を連れて三国のまちを案内していただいた。後ろに見えるのは三国の建築の伝統様式、かぐら建て。通りに面して二階建ての平入りとなっている

西村先生の先に、何が築けるか

—学の立場として、どのようにまちづくりに参加していきたいと思っていますか？

矢吹：個人とか法人とかは関係なく、やってみたいアイデアを、パッと実験・実践できるチャンネルでありたい、オープンエンドな場所にしていきたいというところをまず大事にしたい。また、中島先生とも時々話していることでもあるけれど、学として考えたいのは、歴史的市街地において、まちなみやデザインを専門とするUDCなのだから、景観まちづくりや、観光まちづくりをアップデートしていきたいですね。これまで柏の葉などでは、北沢先生や出口先生が新しい市街地をデザインすることに取り組んできた。でもこのセンター長は西村先生。その意味は、これまでの観光・景観施策をどうやってアップデートできるかということにある。学術的に、西村先生の景観・観光まちづくりの先に何が築けるか、そこに挑まなきゃいけない。

—三国は歴史的市街地の再形成を、法律による規制や補助に頼らないことを選びましたよね。

矢吹：三国は歴史的な町並みを持つが結局重伝建などにはしなかった。そのあとまちがどうなったかといえば、三国に特徴的に見られる建築様式・かぐら建て⁸が消え続けている。ある日突然取り壊されてしまったり。このような状況はまずいな、と思った。だから、僕たちの活動は、重伝建になることを選ばなかったとい



三国祭り当日のUDCS。実はまちなかには一息ついて休める場所が少なく、中庭に置かれた椅子にはいつも誰かが腰掛けていた。子供を連れてやってくる家族も

う三国の判断の延長の先に、歴史的市街地を保全するためのデザインガイドラインの作成や、マネジメント組織としてのUDCの関与の方法を考えるということになる。更新しても「らしさ」を守れるモデルのまちなかになれたらいいな、と思っています。いきなり保全型に切り替えましようということではなくて、更新型の新しい方法論を模索中なのです。

ディレクターは男しかいないけれど…

—これから先の展望と、矢吹さんの関わり方について教えてください。

矢吹：短期的には、ちゃんと体制を整えるというところ。ディレクターとしては、うまくランニングする体制を半年〜一年以内に構築して、みんなが役割分担しながら運用していけるようなリズムを作りたい。長期的には、いくつかのパワーのある事業がずっと並行して走っているような状況にしたいと考えている。収益事業のような、企業や銀行等を巻き込む目立つ事業も必要だけど、空き家相談会の時のように、淡々と地域の人たちのサポートをし続ける事業のようなものも、とても重要だと思っています。この二つにうまくメリハリをつけて、ランニングさせていければ。

他には、子育て世代をうまくエンゲージしたいですね。いま、ディレクターには男しかいない

状況だけれど、それってどうなんだろうとは思っています。子育て世代って一番忙しくてまちづくりなんかやってる暇はないというのが正直なところだと思うけれど、そういう世代こそがまちの主役だとも思っているので、彼らをうまく取り込めるような仕掛けをしていきたい。最近UDCSにも子供がよく遊びに来ていたりするけれど、それはいい傾向だと思う。子供が来ないとお母さんたちも来ない。子供が来やすいUDCであれば、子育て世代が関与できるような状況にしていけるかもしれない。

お祭り気質に火をつけて

—最後に、三国の魅力を教えてください。

矢吹：三国の人たちは、4地区からなる坂井市の中でも結構、血気盛んでお祭り気質なところがある。行くところでは行くぞ、みたいな。だから、いけいけな性格を活かして、それに火をつけることができればまちはいい方向に向かうと思う。僕はディレクターだけれど、前面に出るというよりは、後ろで三国の人たちの活動をバックアップする、いわばその人たちが乗る屋台を作るのが仕事だと思っている。ただ、難しいのは着火するポイント。タイミングを間違えれば火はつかない。うまく見極めて、まちづくりを盛り上げられたらいいと思っています。■

⁶『アーバンデザインセンター 開かれたまちづくりの場』：アーバンデザインセンターの意義、役割に加え、まちづくりやアーバンデザインの先進事例を紹介している。

⁷前田先生・野原先生・黒瀬先生・遠藤新先生：東京大学・都市デザイン研究室の歴代助教。全国各地でUDCやそれに類するまちづくり組織の運営に関わっている。

⁸かぐら建て：三国特有の伝統的な建築様式のひとつ。妻入り屋根の主屋の正面に、平入りの前半分が連結されている。



三国でシナリオプランニングができるんじゃないか？

—まずはじめに、三国プロジェクトを始めたきっかけを教えてください。

中島：2013年に県の予算で三国の町家活用プロジェクトができることになりました。坂井市が運用し、地元のまちづくり会社三国會所がプロジェクトをリード、調査研究パートを現センター長の西村先生のいる東京大学都市デザイン研究室が入ることに。ちょうどその年に、僕が研究室の助教に就き、担当することになりました。

—なぜUDCSをやると思ったのですか？

中島：2015年度にプロジェクトの中で調査研究をまとめた『三国まちづくりビジョン』を作ることになって、その中でアーバンデザインセンターを提案しました。三国の場合、まちづくり会社や商工観光系、自治体のネットワークがしっかりしていて、行政との距離感も近かった。そこにこの町で地域連携を考える主体や民間企業のえちぜん鉄道などがたくさんあって、それらのリソースを集めて掛け算していくのがいいのではないかと考えた。そのデザイン調整をすれば、良いまちづくりのデザインができるんじゃないかという期待があったわけです。2006~7年ごろ北沢先生が晩年に考えていらしたアーバンデザインの手法に「シナリオプランニング⁸」があります。都市計画マスタープランのようにトップダウンでまちの将来を計画するのではなく、複数のシナリオを作り一つ一つのシナリオを関連性や多主体で議論しながら更新してボトムアップで作っていく、というものです。それをこれだけ主体が連携していれば、シナリオプランニングを実際にコーディネートしてまちを良い方向に改善していくことができ

やりたいと思っている人が住民の中にいることが大事なこと

—シナリオは動き始めていますか？

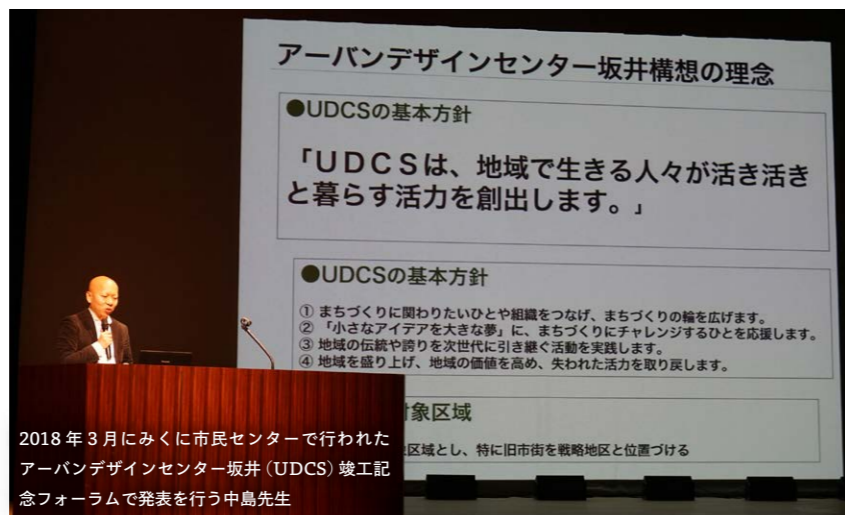
中島：まだこれからじゃないかな。センターができただけで、町がある方向に変化しているところまではいってない気がします。ただ兆しは出てきていて、個別に空き家の活用が始まったり、えちぜん鉄道が新たな観光事業に着手したりと、第一段階のシナリオが動き始めていると感じています。当初シナリオでは空き家となっていた「雲乃井」は旧町内以外の農業や漁業など一次産業の拠点になればとも考えていましたが、アーバンデザインセンターが実際に建ち、現在は小学生が放課後、宿題したり、遊んで帰る状況が生まれてきています。こないだは親が子供をここに預けて買い物に行ったケースもありました。まちを改善するシナリオを書いて、アクションを起こしながら方向性を協議し、それを現場でつなげていけたらと思います。UDCSは始めて2ヶ月しか経っていませんが、10以上のプロジェクトが動いています。プロジェクト管理がとて大変ですが、そこが我々の職能だと感じています。やりたいと思っている人が住民の中にいるというのが大事なことだと思っています。基本的には住民の方がより豊かに生活するためにやっていることで、主体は僕らではなく、住民だと思っています。

るのではないかと思います。ただ僕一人が考えてはできないのですが、坂井市の谷根さんであったり三国會所であったり、福井銀行などの企業、いろんな方が参画してくれたおかげで成立したと思っています。

都市デザインで生活の改善に繋がりたい

—住民の認知度はどれくらいですか？

中島：まだまだだと思います。今はいろんな人が来て使ってもらうことが大事だと思います。しかしただ使ってもらうだけではなく、例えば踊りの稽古をやる人が使ってくれたときに、活動の向こう側にある問題をキャッチしないといけないと思っています。その人たちがどういう人で何を考えていて、どういう状況に置かれているかを都市デザインとして広く考え、生活の改善に繋がっていかねばならないと思っています。現在は矢吹さんたちにディレクターになってもらい空き家の利活用の相談に来た住民の方と話したりしています。



2018年3月にみくに市民センターで行われたアーバンデザインセンター坂井（UDCS）竣工記念フォーラムで発表を行う中島先生



暮らし方が選べるような社会にしたい

中島：空き家はどこに生まれるか予想がつかないので、いくつかのシナリオのレイヤーを作って、どこに空き家が生まれても何かしらアイデアが生まれているようにしておく、これがシナリオプランニングの大事なレイヤーの考え方です。そして各シナリオを書き換えながら順応していく。今はまだ始まったばかりでこれからだと思います。今、日本では暮らし方の選択肢がある程度限られている気がしていて、そこにもっと色々な選択肢があっていいと思っています。20世紀の都市計画やまちづくりに求められていたことは「真っ当な生活を保証すること」だったと思います。一方で我々は平和ボケもして、真っ当な暮らしというのがどんなものかというのを考える必要があると思います。そのためには納得行く生活をそれぞれが選べるような社会にしていかなければいけないと思っています。人が何かやりたいとなった時に能動的に発揮できるような、それが都市で運用できるようなことができればいいと思います。それには調整する機能が必要で、それがアーバンデザインの役割だと思います。今までの企業は利潤追求が中心でしたが、利潤追求を求める先の地域が細っている中で真剣にまちづくりを考えています。その中でできると思うリソースを耕していき選択肢を広げているのが現状です。



アーバンデザインセンターについて、地元の方との勉強会。ここからたった2年でUDCSが生まれた

三国の他にも、まちづくりが動き始めている

—UDCSのSは坂井のことだと思いますが、三国の中心にやっているイメージがあります。坂井市全体への将来的な波及も考えはありますか？

中島：はい。坂井市はもともと4町が平等協調合併をしたので、三国はその4分の1です。元々三国の人達に呼ばれてプロジェクトを始めましたが、受け皿となる自治体は坂井市なのでオール坂井でやりましょうということです。しかし人口減少の問題は旧4町の中で三国が圧倒的に進んでいます。いずれ日本が定常社会になっていって人口減少が進み、規模が小さくなっていくとすると、その中で限られたリソースを補いあいながらまちづくりを進めていく体制はどの市町村でも必要になってきます。そのときに坂井市ではまず三国を先行的にやっているということです。いずれは4つセンターを作るかもしれません。今、三国と同時進行で丸岡も、丸岡城国史化運動をやっている旧市街のエリアがあって、まちづくりが少しずつ動き始めてきています。丸岡については、今年度から調査の関わりでUDCSないし三国プロジェクトで入っていき、三国でやっていっていることを念頭に組織体制づくりにつなげていきたいと思います。どれくらいの速度感でできるかは分かりませんが、坂井市は動き始めると早いです。UDCSも2年で作っちゃったからね。

—なんでそんなに早いんですか？

中島：まちの規模が小さいので「やるぞ！」って思った人がやるしかありません。東京だってもっと本当はいろいろできていいはずですが。だけど、「やるぞ！」って思った人がリソースを集めてくるまでに時間がかかって、「やれない」と思ったりするわけです。けど、「やりたい！」と思った人は思った瞬間にやり始めているもの

で、坂井市や三国の人は素直にそうしていることだと思います。だからすさまじい速度感でやっていくわけです。これは地方のファースト性だと思います。ただセンターを4つ作ったときにマネジメントをどうしていくかという問題も多分にあるとおもっています。人口が減少しているので体制も併せて作っていかないと、疲弊していくと思います。

空き家ができることは当たり前

—アーバンデザインセンターには学という側面がありますが、今取り組んでいる研究の内容を教えてください。

中島：現在、空き家から見た三国のまちの研究をしています。そもそも空き家ができることは当たり前で、家というのは「空くことがあるもの」だと思っています。それが量として過剰に多くなっていることが問題で、その量に関してどれだけの量、空き家率が高くなったら問題なのかということはなかなか研究されていないと思います。そもそもまちでは人の入れ替わりというのがどのように起きているのかを把握する必要があります。外からも含め、中でも人が生まれて人が死ぬ、死んだ後に次の代に繋がれることで都市が更新していると考えていて、今は特に不動産の継承をどのようにしているのかを見ています。歴史的市街地の家々がどのように継承されているのかをちゃんと調べようとしています。研究の中で出てきたアイデアはUDCSでやっていけばいいと思っています。そういうヒントは研究をちゃんとしていって町の人がどう思っているか生活の仕方が分かってきて、それを合わせていけたらいいんじゃないかと思っています。現在、福井の大学の新入生向けの4年間限定の町屋の定期借家のシェアハウスを考えています。大学生なら出て行く期間が決まっているので貸家業を行いやすいと考えています。そもそも借家の問題として大家が入居者を生存権で立ち退きを強制できない現状が

⁸ シナリオプランニング：故北沢猛らが提唱した都市計画の手法。まちづくりのシナリオをはじめに立て、それを現場にいるスタッフで更新していく。

あります。貸し続けるというのはとてもリスクがあり、自分の息子の世代がいつ戻ってくるから分からないから、空き家としてひとまず置いておく方もいます。ただし人が住まないと家はどんどん傷んでいきます。一方で貸家業務を近所で始めたと思われると世間体が気になり貸したくないという視点もあってその状態を変えていくことが大事なと思っています。貸すことが地域の貢献につながっていて、ゆくゆくはその人のためにもなることを説明するなど、三方よしのデザインを考える必要があると思っています。

伝統的な不動産継承を明らかにしたい

中島: このテーマを始めたきっかけは、この街に不動産は2件しかなくて町家の不動産情報が出ないということでした。空き家バンクもほとんど活用されてない状況で、ここに今いる人達はいつどのタイミングでどうやって入ってきたのか。それは相続だけではないと思っています。そこで僕が思ったのは不動産屋というのは近代以降に発達した不動産仲介業であってそれが三国では機能していないということではないかと考えたんです。とするとこの地域には近世以前からの不動産継承の形があるはずで、それを調べることで近代の不動産仲介業が入ってこれない理由が出てくるのではないかと考えています。それを解くために不動産継承がどうなっているのかを今研究しています。昔は子供がたくさんいて誰かが継承するという形をとっていましたが、現在は核家族化して子供も減っているので不動産を継承する人数が減って

いて、どんどん空き家が増えていていると思っています。ただ逆にライフスタイルの中で三国の町家に住みたいと考える人もいます。しかし不動産継承が伝統的だとまちに入る穴がなくて、外の人が入ってこれていません。近世以前のもので限定された人しか入れなかったが近代以降の不動産仲介業はそれをフラットにして誰もが入れられるようにしました。それは法律でクリアしていきましたが法律以外で伝統的な不動産のスタイルでやっているところがあり、そこが面白いなと感じています。今はUDCSの運営体制を整えるのに時間がかかっていて研究になかなか時間は割けていませんがそういうことやりたいと思っています。

住むように都市デザインを

—三国の良いところ、三国ならではの風景を教えてください。

中島: 本当に三国の風景が素晴らしい。川湊で、地形があって、歴史がちゃんと感じられて、いい日常が場面場面で見えるし、どこを歩いても三国らしいと思う印象的な風景がいっぱいあるので。ご飯もおいしいし、素晴らしい人たちがいっぱいいて、三国のことを本当に普通のまちの人も、ここに住んでいてこの街が好きなんだなって思うシーンがいっぱいあっていいなと思います。だからもっと良くなる要素があるはずなので頑張らないと、と思っています。

—将来的に三国に住みたいですか？

中島: 住みたいよ。でも悩ましいよね、都市デザインをやっているとそこが難しい。西村先生の言葉に「人生は一度しかない、しかし、都市を



研究しているということは沢山の人生を知らないといけない。それができるのかという問題がある。その問題を解くカギはやはり「イマジネーション」というのがあります。だから、想像して都市デザインをやるってところまではできますが、自分の人生をどういう風に、どの都市で住まってるというのが難しいと考えている。でもいずれは三国に家が欲しいよね。それは家というものをどういう風に捉えるかっていう風に、どこまでが家族なのかとか、そういうのとかももっといろんな形も可能性もあるだろうし、そうしたときに三国に住みたいと思う。その住むというのはどういうことなのだろうとは思うし、じゃあ今住んでいないのかといわれたときに住んでいる気持ちもなくなはないと思っています。

今回矢吹さんがUDCSに入ってきてくれて、ディレクターで住んでもらっているけど、うらやましいなとも思います。あそこに住めて、アーバンデザインセンターで仕事できて、やりたいなあって思います。プロジェクトをやっている以上は住むように都市デザインをやって、地域に関わりたいです。それでもやっぱり、自分には一線を越えられない向こう側とこっちには隔りがあるのだということも常に自覚したいと思っています。常にそのへんはやっぱり悩みます。それでもなお、一線違うところから勇気をもって大胆に、こうした方がいいんじゃないかって提案するんじゃないかな？ 難しいし、楽しい仕事だと思います。■

今回のUDCS取材で5月19日と20日の二日間、三国を訪ねました。祭りで多忙の中、突然押しかけた僕を暖かく迎えてくださった谷根さんと倉橋さん、三国へ招いてくださった矢吹さん、そして三国への思いを熱く語ってくださった中島伸先生、本当にありがとうございました。UDCSのオープンさが、とても居心地の良い空間に感じられました。(中戸)

聞き手= 中戸(谷根さん・倉橋さん・矢吹さんインタビュー)
岡山・原・藤原(中島先生インタビュー)



何気ない民家も、祭りの時には二階が山車をみる「特等席」となる。まちを歩けば、三国らしい風景が広がっている

text: 前山, 岡山 / Maeyama, Okayama



2018 三国祭: 前庭で三国高校の生徒と協力インタビュー調査を実施



2017 秋: 住まい方に関するイベント風景

2016 夏: 調査風景



2015.05.13.
下新公園整備説明会

下新公園整備の設計・計画案を平面図やパースで表現し住民の方の前で発表しました。



2017.05.19-20 三国祭
空き家貸座敷

木谷家の1階部分をお借りし、貸座敷をオープン。祭り期間中、地元の方や里帰りした人、観光客などが飲食を楽しみました。



2018.05.19-20 三国祭
三国寄り合い処

訪れた人の思い出の場所やおすめの場所を記した「三国マップ」にはたくさんの声が集まりました。高校生とともに来場者の方々へのインタビューも行い、様々な三国との関わり方に触れました。

3. 三国と東京大学都市デザイン研究室

蓄積をつなげる 5 年目

<ul style="list-style-type: none"> 発足 基礎調査 歴史的空間再編コンペ 下新公園設計 	<ul style="list-style-type: none"> 調査(三国祭, 土地利用, 景観資源, ヒアリング調査) イベント参加の研究発表 まちづくりビジョン作成 	<ul style="list-style-type: none"> マチノニワ活用実験 空き家調査 みにいくみに 	<ul style="list-style-type: none"> 三国祭での空き家貸座敷 住民と専門家の意見交換 「住まいの将来相談会」 	<ul style="list-style-type: none"> 空き家社宅利用 始動 三国高校との連携 空き家でのイベント企画 不動産流通調査まとめ
2014	2015	2016	2017	2018 (予定)

東大三国プロジェクトは2014年に発足し、今年度で5年目に入りました。「5年目」は現在進行中の都市デザイン研究室由来のPJとしては最長です。研究と実践の双方に、確かな蓄積が存在しています。

三国プロジェクトは主に、町に点在する空き地や歴史的建築の空き家について、実態調査および活用に向けての企画を進めてきました。三国の建物が継承されてきた背景に、地縁による建物取引が存在していること、近年新規居住者が減少しそれが成立しなくなってきたことが分かってきました。

今年度は引き続き不動産流通の実態調査を続けながら、三国周辺の企業向けの社宅としての空き家活用の提案や、三国高校と連携したまちについての学習および空き家を使った企画の立案・実施を行います。三国に空き家ができる背景が分かっていた5年目は、UDCSとも協働しながら、町や空き家に関わる新たな担い手の創造を目指し、まちと人々との多様な関わり方を提案していきます。

現役学生が語る「三国への思い」

三国駅を降りて、湊町のゆったりとした空気に触れると、不思議と「帰ってきた」感じがします。そう感じるほど、去年1年間で色々なことを経験しました。特に印象に残っているのが昨年秋のワークショップの中で、「君らはここで住めるのか」と聞かれたこと。余所者としてではなく自分事としての意見が欲しいというその問いにはまちに対して本気で関わって来たいという思いがこもっていて、この街を変えていくことの大きさを再認識しました。

三国では、沢山の人が本気でまちをよくしようとして動いています。その中で、1プレイヤーとして、不器用でもいいので、まちに貢献したい。いずれ家族ができたときに、こんな素晴らしい街があるんだと言えるようになってほしいというのが今の秘かな目標です。



プロジェクト2年目
但馬 慎也



プロジェクト1年目
前山 倫子

「熱い町」と聞いていた三国には、降り立って見るとそれに反して静かで落ち着いた町並みがありました。しかし、本祭りの日には掛け声やお囃子が響き、町の「熱さ」が一気にあふれ出します。山車曳きに参加させていただいていた私は、その流れについていくので精一杯でした。

町並みの裏には、それを継承してきた人々や町で何かをやろうとしてきた人々の思いの「熱さ」があることを、なんとなく実感しました。

三国で暮らす人や継承されてきたもの、今確かに存在する思いを大切にしつつ、でも変化を恐れずに、活動に取り組みます。自分も三国に関わる一人だと堂々と言えるようになります。



編集後記

道に視線を落とすと、車のタイヤとは違う細い轍が刻まれている。「それは山車が通ってできたんだよ」と、矢吹さんが教えてくれた。かつて高さ10mを越したという山車は、今では張り巡らされた電線のために5mほどまで縮んでしまったけれど、それでもまちを曳かれていく時には撞木で電線を掻き分けながら悠然と進んでいく。まちの姿が祭りのあり方を規定する一方で、祭りがまちに痕跡を残す。祭りとは相互に影響しあっているのだと、倉橋さんが夜話会で語っていたことを思い出した。それは僕にとって全く考えたことなかった視点で、まちの見方がまた少し変わったような気がした。

僕のまちにはこれほど大きな祭りはなくて、1年のうちたった3日の霽れの日を中心に回る三国のまちは、とても新鮮に映った。普段はどんな生活をしているのだろうか？日常のまちの姿も、見てみたくなった。
(中戸)

MAP えちぜん鉄道「三国駅」より徒歩約10分



address

福井県坂井市三国町南本町 3-6-51
(松の下区 きたまえ通り沿い)

SNS イベント告知や報告、三国のお店情報など更新中です！



facebook
「@udcsakai」
<https://www.facebook.com/udcsakai/>



Instagram
「udcs_mikuni」
https://www.instagram.com/udcs_mikuni/

